

# 神仏習合の歴史展開

東海林 克也  
SHOUJI Katsuya

## 1. はじめに

2011年3月11日に起きた東日本大震災を経て、地域共同体社会が改めて問い直されている。震災から復興するために「繋がり」「絆」という言葉が使われ、人間、自然や地域の関係が見直されている。

震災当時、各地の社寺は地域の避難場所となり1つの共同体の場を形成した。また、神社では鎮魂のために祝詞を読み神々に対し震災復興祈願の祭祀をおこなった<sup>(1)</sup>。市民の人々は、募金を集め津波で流失した社寺の再建を支援している<sup>(2)</sup>。言い換えれば社寺は地域社会に住む人々にとって心の拠り所となっている。

心の拠り所とは、社寺の関係として日本人の信仰は、不変的なものだったのではないかと考えられる。不変的なものは「日常」であり「無意識の世界」である。

地域共同体社会という社会集団（村・町など）は歴史の積み重ねによって維持・発展することができる。その村の維持継承のためには、古来から安定的な「五穀豊穡」が必要不可欠である。「五穀豊穡」により村の維持や生活基盤の安定を図ることを目的として「神仏に祈る」ことを行っていた。つまり、村の維持として表面に具現化したものが「五穀豊穡」である。それは認識されずに心の奥底に存在するのが「村を存続させようとする意識」であると同時に「神仏への信仰」であったと考えられる。

この心の奥底にある「村を存続させようとする意識」は「不変的なもの」と同時に無意識の日常である。

「日常」は「非日常（3・11東日本大震災など）」によって、その社会集団（村・町などのコミュニティー）の維持は不安定になる。それは今まで「不変であった日常」が「非日常」へと変化し、本当は「不変」ではなかったのだと改めて気付いてしまうのである。すなわち、「非日常」という衝撃により「コミュニティーという場の崩壊」に繋がってってしまうのである。それは今まで心の奥にしまわれ認識される間もなかったものが認識される（表に出てくる）ようになる。

そして「コミュニティーという場の崩壊」によって無意識であった「信仰」を私たち人間は再確認するのではないだろうか。

現代の地域社会・共同体から新しい共同体・地域社会をつくる上で社寺を場の中心とした人間と信仰を切り離すことはできないし、心の拠り所となる社寺が地域共同体社会の「核」となっていることは間違いないだろう。それでは社寺が「核」というこ

とを考える場合には次の問題について論じなければならない。

それは、神社（神道）や寺院（仏教）という2つの異なる宗教がなぜ同時に存在（習合）し、信仰されているのかということである。これはいわゆる「神仏習合思想」というものである。

日本文化、日本の信仰や地域共同体社会を支える日本独特の思想であり、日本文化（日本学）を研究する際に避ける事は出来ない問題である。

以上のことから、日本の精神の基となっている神道と仏教が混じり合う神仏習合思想の歴史展開について考察する。

## 2. 神仏習合について

神仏習合に関しては、538年<sup>(3)</sup>に仏教が公伝され、崇仏派・廢仏派の対立があり<sup>(4)</sup>、8世紀から越前国神宮司、氣比神宮司、若狭比古神宮司、多度神宮司などの多数の神宮寺が建立された。神のために僧侶が置かれ、神前読経、加えて神に菩薩号が与えられる形で仏教優位の地位が築かれた（神身離脱説）。仏教からのアプローチによって、東大寺大仏建立を助けるために宇佐八幡が上京するなどの事例から仏教を護る神（御法善神説）として把握されていった。

このような背景のもと、本地垂迹説、つまり、神の元は仏、菩薩であり日本の衆生を救うために神の姿となって現れた（神は仮の姿、本当の姿は仏・菩薩である）という説が成立したと現代まで理解されてきた（本地垂迹説）。

この本地垂迹説は平安時代中期から後期にかけて全国的に流布し、国内の神々には特定の仏、菩薩号があてられた。仏の靈験は神の神徳の説明に役立ち、民衆教化の出発点でもあり、中世の神道は、これを理論化し展開したといわれる<sup>(5)</sup>。これら神仏習合の諸形態については第3節にて考察する。

### (1) 神仏習合の概念規定

神仏習合については、多くの先学者が研究されている。そして、概念規定についてもそれぞれの考えに基づいて規定されている。

先ずは、「神仏習合」とはどのようなものか辞書類から整理してみたい。

「我が国の神祇信仰と仏教が接触、混融して独特の行法・儀礼・教義を生みだした宗教現象をいう」<sup>(6)</sup>

「日本の自然発生的信仰としての神道と外来の仏教との融合およびその結果生じた諸現象をいう」<sup>(7)</sup>

「日本固有の神の信仰と仏教信仰とを折衷して融合調和すること」<sup>(8)</sup>

また、研究者の概念をまとめると菅原信海氏は、

「神仏習合とは、我が国に仏教が伝来してから、日本の神と仏がどのように結び付いたかの現象である」

「神道とも仏教ともいえない新しい信仰をつくり上げ、我が国の宗教に新しい宗教現象を創出している（菅原信海、2005）」<sup>(9)</sup>

と定義しており、義江彰夫氏は、神祇信仰と仏教が複雑なかたちで結合し、独特な信仰の複合体を築いたもの（義江彰夫、1996）<sup>(10)</sup> としている。

以上が代表的な考え方である。これら先学者の概念をまとめ、整理して考えると神仏習合とは「わが国固有の神祇信仰・土着的信仰（神）と外来の仏教とが結びつき融合して現れた日本独特の信仰形態とその現象」と定義することができる。

### 3. 神仏習合の諸形態

#### (1) 神身離脱説について

この説は7世紀初頭から奈良時代にかけて現われた思想である。神は人間と同じように悩み苦しむ存在であり仏法の力により救われる存在であるという考え方である。日本の神は六道（地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人・天）の中を輪廻する苦しみから脱していないと考えられ、仏教によってその苦しみから脱することができる（末木文未士、2006）<sup>(11)</sup>。この思想のもとに神を輪廻からの解脱に導くために寺院の建立が行われ、神宮寺と呼ばれるようになる。

神宮寺は神願寺・神護寺・神宮院・神供寺・別当寺とも呼ばれ数多くの神宮寺が建立された。さらに神前で読経（類聚国史）<sup>(12)</sup> など様々な仏教儀礼が営まれることとなる。この現象が神仏習合の出発点と考えられる。

特に神宮寺の初見が『日本霊異記』であることに注目したい。『日本霊異記』は日本最古の仏教説話集であり、仏教を流布するための説話集である。神宮寺の中心思想は、神の地位は仏の下に位置されている。私見であるが、『日本霊異記』上巻1、2、3話がそれぞれ神の地位の低下（神の否定）、神婚、元興寺の縁起譚となっている。その中で、神宮寺の建立が現れることは重要な意味を持つと考えられる。

この神身離脱説（神宮寺の建立）が奈良時代に入り、御法善神説が出現する。

#### (2) 御法善神説

神身離脱説が唱えられ、神宮寺が建立され、奈良時代になると、御法善神説が唱えられるようになる。

この説は奈良時代から唱えられた思想で、東大寺大仏建立の際に九州の宇佐八幡が、大仏建立を守護するため上京したというもの。もともと仏教はインド古来の神を否定せず、仏教を守護する神としており、日本の神も仏教を守る神としたことが前提にある。この八幡神は大仏建立の守護をしたことにより朝廷により「護国靈験威力神通大自在王菩薩」という菩薩号を授与されている。仏教を守護するこの事例は、仏教側は土着の神の援護を受けいければ日本の社会に定着しやすくなり、神の側からすれば、中央の権力と結びついた仏教の勢力を伸ばすことができるとし、双方の利害が一致した例としている（末木文未士、2006）<sup>(13)</sup>。さらに神は「動く」ことができることで、八幡神の勧請が各地に進むことになる。

このように、神身離脱説、護法善神説が唱えられ時代が進むにつれてついに、神仏習合説の到達点である本地垂迹説が説かれるようになる。

### (3) 本地垂迹説

平安時代に入り、仏は日本の神の本来の姿である「本地」で人々を救うために仮に神という姿で現れた「垂迹」の姿であるという思想である。この思想が神仏習合の到達点であり、完成形態である「本地垂迹」といわれるものである。仏教側からの神祇信仰を抱き込んだ教説体系といわれる（義江彰夫、1996）<sup>(14)</sup>。

「垂迹」という語が文献上初めて見ることができるのは『三代実録』<sup>(15)</sup>であるが、本地垂迹思想の語として使用されたものではないと考えられ、実際に使用されたものは、『石清水八幡宮文書』と指摘されている<sup>(16)</sup>。

奈良時代から平安末にかけて、熊野の本地は阿弥陀如来賀茂の本地は観音、八幡の本宮、新宮、那智には、それぞれ阿弥陀如来、薬師如来、観音が与えられ、春日の本地は不空罽索観音、伊勢の本地は大日如来や観音菩薩など具体的な本地垂迹説が唱えられようになる。

上記のように本地垂迹説が全国的に拡大すると、各神社の中に本地仏の仏像や神像がおかれるようになる。

## 4. まとめ

古くから続く神祇信仰（土着的信仰）が仏教の伝来によって「神道」の語が使われるようになった（神道の語の初見は『日本書紀』に見え、仏教（仏法）に対比する形で使われた）。仏教という思想の出現、流布によって日本全国に広まっていくことになる。その過程で日本の神祇信仰（土着的信仰）は神道（神祇信仰＝土着的信仰）の自覚を持ち、仏教理論の影響を受けることにより体系的な神道思想が確立することになった。それが中世神道説を形成し、全国的に展開することになっていく。

仏教が伝来し、神仏習合思想が発生・展開して1200年以上歴史がある。明治の神仏判然令により一時的ではあるが神仏習合が途絶えたが、今日でも神仏習合思想は続いている。

はじめに述べたように、地域共同体は「信仰（この場合は神仏習合思想）」が心の奥底（日常）にあることで不変的な日常を過ごすことができるのである。つまり、日本人の精神的基盤となっている。その「神仏習合思想」という精神的基盤を中心に置くことにより「場の再構築」ができるのではないかと考えられる。結果として東日本大震災の復興、コミュニティーの再興など現代社会が抱える問題を「信仰」を軸にして解決することに役立つと考えられる。

## ■註

- (1) 神社本庁 HP「復興支援活動」及び復興支援祭祀
  1. <http://www.jinjahoncho.or.jp/reconstruction/000069.html>
  2. <http://www.jinjahoncho.or.jp/reconstruction/000071.html>
  3. <http://www.jinjahoncho.or.jp/reconstruction/000074.html>
  4. <http://www.jinjahoncho.or.jp/reconstruction/000080.html>
  5. <http://www.jinjahoncho.or.jp/reconstruction/000085.html>
- (2) 東日本大震災神社再建について
  1. 宮城県陸前女川白山神社再建計  
<http://www.onagawahakusanjinja.jp/saiken.html>
  2. 岩手県山田八幡宮・大杉神社支援プロジェクト  
<http://wawa.or.jp/project/000012.html>
- (3) 『日本書紀』には仏教伝が552年とされるが信憑性に疑問が残る。
- (4) 崇仏派・廃仏派の対立は捏造されたものという認識が定説になりつつある。
- (5) 平安時代から中世にかけての代表的な神道として山王神道、両部神道、伊勢神道、吉田神道などがある。
- (6) 1985、『国史大辞典』吉川弘文館
- (7) 2002、『新社会学辞典』有斐閣
- (8) 1998、『広辞苑』第5版、岩波書店
- (9) 菅原信海、2005、『神仏習合思想の研究』春秋社
- (10) 義江彰夫、2008：1996、『神仏習合』岩波書店
- (11) 末木文美士、2012：2006、『日本宗教史』岩波書店
- (12) 『類聚国史』
- (13) 末木文美士、2012：2006、『日本宗教史』岩波書店
- (14) 義江彰夫、2008：1996、『神仏習合』岩波書店
- (15) 貞観元年（859）、『三代実録』8月28日条
- (16) 辻善之助氏が提唱する。

## ■参考文献・資料

- 遠日出典、初版1986、『神仏習合』臨川書店
- 遠日出典、2007、『八幡神と神仏習合』講談社
- 義江彰夫、初版1996、『神仏習合』岩波書店
- 末木文美士、初版2006、『日本宗教史』岩波書店
- 佐藤弘夫、2006、『神国日本』筑摩書房
- 菅原信海、1996、『日本思想と神仏習合』春秋社
- 菅原信海、2005、『神仏習合思想の研究』春秋社
- 菅原信海、2007、『日本仏教と神祇信仰』春秋社
- 佐藤真人、2011、「本地垂迹説の存立の根拠をめぐって」伊藤聡編『中世説話と神祇・神道世界』所収、竹林舎
- 鎌田純一、2010、『神道史概説』神社新報社
- 岡田荘司編、初版2010、『日本神道史』吉川弘文館
- 田野崎昭夫、1989新装版、『現代の社会集団』誠信書房
- 松本健一、初版1978、『共同体の論理』第三文明社
- 内山節、2010、『共同体の基礎理論』農山漁村文化協会
- 『類聚国史』

『三代実録』

『現代社会学辞典』

『国史大辞典』

『新社会学辞典』

『広辞苑』

神社本庁 HP 「復興支援活動」及び復興支援祭祀

1. <http://www.jinjahoncho.or.jp/reconstruction/000069.html>
2. <http://www.jinjahoncho.or.jp/reconstruction/000071.html>
3. <http://www.jinjahoncho.or.jp/reconstruction/000074.html>
4. <http://www.jinjahoncho.or.jp/reconstruction/000080.html>
5. <http://www.jinjahoncho.or.jp/reconstruction/000085.html>

東日本大震災神社再建について

1. 宮城県陸前女川白山神社再建計画  
<http://www.onagawahakusanjinja.jp/saiken.html>
2. 岩手県山田八幡宮・大杉神社支援プロジェクト  
<http://wawa.or.jp/project/000012.html>